

研究ノート 高松城はいつ造られたか

佐藤 竜馬

はじめに

近年、戦国期～織豊期における地域の政治的拠点の動向をめぐる研究が、四国地方においても活発に行われるようになってきた。阿波・勝瑞城、讃岐・引田城、伊予・湯築城の調査の進展と歴史的評価への試みがその動きを先導し、「新・清須会議 守護所シンポジウム2 @清須」(A)や「阿波の守護所・城下町と四国社会」(B、2014年)、「四国の近世 アワコウコ楽公開講座」(C、2015年)などで一定の到達点と問題点が示された。

讃岐においては、引田城の調査の進展が、発掘成果の蓄積が著しい高松城の再評価の動きに繋がりがつつあるのが現状である。筆者は、A・Bで讃岐の政治的拠点の状況を報告したが¹、この作業に伴い高松城・城下の建設・形成過程について、従来の所見とは異なる見通しを提示した²。現段階では、まだ粗い見通しに留まる内容であるが、今後検証されるべき仮説あるいは見通しとして、以下に整理しておきたい³。

なお、本ノートをなすにあたり、渡邊誠・高上拓(高松市創造都市推進局)、御厨義道(香川県立ミュージアム)、乗岡実(岡山市教育委員会文化財課)各氏の多大な御教示を得た。厚く感謝申し上げる。

1. 従来の「通説」への疑問

1-1. 「通説」のストーリー

- 1) 1587年(天正15)、豊臣秀吉の命により、播磨赤穂6万石の領主・生駒親正が讃岐国主として移封となった。親正は、まず引田城に入り、次いで宇多津の聖通寺山城(平山城)に移り、翌1588年(天正16)に香東郡野原の地に高松城と城下を築いた(『南海通記』)。引田城の後、聖通寺山城・亀山(後の丸亀城)・由良山(現在の高松市由良町)と城の候補地を考えたが、結局高松築城に至ったとする説(『生駒記』など)もある。

1 佐藤竜馬2014a「讃岐における13～16世紀の政治拠点」『新・清須会議 資料集』新・清須会議実行委員会

b「讃岐における中世の政治拠点—時間軸と空間軸の観点から—」『阿波の守護所・城下町と四国社会』城下町科
研・徳島研究集会実行委員会

2 佐藤竜馬2014c「高松城はいつ造られたか」高松老人大学発表資料(2014.10.3)

3 その後の検討により、筆者の誤認・誤読と判明した部分を訂正している(三ノ丸の屋敷について等)が、それ以外は高松老人大学発表資料をほぼ踏襲した

- 2) 親正は1589年（天正17）、藤堂高虎の仲介で黒田孝高に高松城の縄張りについて見分してもらい、「究竟ノ城地」すなわち最もふさわしい場所だとの意見をもらった（『南海通記』）。このほかに、細川忠興が縄張りを行ったとの説（『生駒記』など）もある。
- 3) 高松城は、1590年（天正18）に完成したとする説があり、様々な書物やインターネット情報（ウィキペディアなど）にもそのような記述が見られる⁴。

1-2. 「通説」への疑問

- 4) 2)での『南海通記』の記載は、登場人物の肩書きと年代が合わないという矛盾がある⁵。藤堂高虎を「今治ノ城主」とするが、高虎が今治藩に転封になったのは1600年（慶長5）、今治築城を開始したのは1602年（慶長7）のことである。また黒田如水（孝高）が中津に戻る途中高松に寄ったとするが、如水が豊前に封じられたのは1587年（天正15）で、中津築城の開始が1588年（天正16）である。したがって、今治城主たる藤堂高虎と、中津城主たる黒田孝高という組み合わせが、同時に見られることはないのが史実である。
- 5) 3)の1590年完成説の根拠が、明確でない。近世史料で完成年もしくは築城年数について触れたものは未見であり、何をもとにした情報なのか不明である。これは、築城開始年を多くの近世史料が伝えるのとは対照的である。
- 6) したがって、高松城は①誰が縄張り（計画）に関与したか、②いつまで普請（建設工事）が続き、いつ完成したか、の2点が、実はまだ明らかでないということになる。また、高松城を描いた絵図は、1627年（寛永4）に幕府隠密が高松城を見分して記した「高松城図」（「讃岐伊予土佐阿波探索書」所収）以後のものしか知られていないため、③完成当初の高松城・城下町がどのような景観だったかについても、よく分かっていない。

これらあいまいな3点のうち、ここでは②を中心にして、①・③も関連させて考えてみる。

2. 発掘成果から言えること

2-1. 天守台

- 7) 最近行われた天守台の解体修理に伴う発掘調査によって、天守台には改修（再築や石垣の

4 「天正一六年から同一八年にかけて築城した」（『高松城跡』『香川県の地名』平凡社、1989、出展明記せず）との記述がある。また類似した記述として、「生駒親正が、翌[天正]16年より数年を要して当時の香東郡篋原（野原）荘八輪島に築城」（『高松城跡』『角川日本地名大辞典37 香川県』角川書店、1985、出展明記せず）との記述もある。この種の記述の初見資料については、確認できていない。

5 松浦正一1964『高松藩祖 松平頼重傳』松平公益会、胡光2007「『高松城下図屏風』の歴史的的前提」『調査研究報告 第3号』香川県歴史博物館

大規模な積み直し）の痕跡が見られず、建設当初のオリジナルな状態であることが分かった⁶。その建設年代であるが、天守台内部に盛られた盛土層、石垣の裏側に詰められた栗石層から出土した土器・陶磁器は、肥前系陶器を一定量含んでおり、全体として高松城編年の様相1（1600～10年代）の特徴をもっていることが指摘できる。つまり、築城が始まったとされる1588年（天正16）よりも10～20年程度経過した頃に天守台が建設されたことになる。

単純な一般化はできないが、織豊政権の城郭では、本丸や天守の建設が優先される事例がある（安土城・大坂城・肥前名護屋城・岡山城）ことからすれば、高松城全体の本格的な建設は1600年代すなわち慶長期（1596～1615年）を中心とした時期に求められる可能性が出てくる。



第24図 天守台下層遺構

8) 解体修理では、盛土の下から天守台構築以前の中世遺構と旧河道が検出されたとされる。しかし、天守台の建設年代を考えると、下層遺構には築城開始後の1588～1600年頃のものが含まれる可能性は十分にある。また旧河道とされる落ち込み（天守台D・E面：東・南面）は、①付近の遺構面標高が1.0～1.2m前後であり、周囲（西・南・東外曲輪、西ノ丸）での標高（0.6～1.0m前後）と比べても決して低くなく、自然の河川の流れの位置を想定しづらいこと、②幅が幅3～4m程度と河川にしては小規模であること、などから人工的に掘削された溝と捉える方が妥当であろう。主軸方位がN-32°-Eと、城下の地割よりも東に振る点が

気になるが、外曲輪の家臣団屋敷における17世紀前半の区画溝を大きく凌ぐ規模であることから、より上位の屋敷地（居館）に伴う可能性がある。なお、天守台C面（北面）で検出された落ち込みは、報告書では遺構の可能性が否定されているが、天守台構築直前の遺構（溝・土坑など）として再検討の要がある。いずれにしても、築城開始から天守台構築までの本丸周辺には、素掘り溝で区画された施設が存在するという、後世とは全く異なる景観が存在したことは確かであろう（第23図）。

6 中西克也2013「発掘調査」『史跡高松城跡(天守台)』高松市・高松市教育委員会

2-2. 外曲輪

- 9) 上級家臣が屋敷を構える外曲輪では、屋敷内や街路にゴミ穴（土坑）が掘られて土器・陶磁器・木器が廃棄されている。試みに西外曲輪中央部（西の丸町B地区、屋敷地6区画と街路）において、まとまった量を廃棄したゴミ穴がどの程度見られるか、検討した。すると、1600～10年代が7例、1620～30年代が3例、1640～50年代が16例であり、1588～1600年頃のゴミ穴は皆無であった。1588～1600年頃のゴミ穴の不在は、他の調査区でも指摘できる現象である。このことは、外曲輪での日常的なゴミ処理が、1588～1600年頃には極めて低調だったこと、つまり生活感の希薄な状況を示している。
- 10) 屋敷地の区画施設（溝や堀）にも1588～1600年まで遡るものは、今のところ皆無である。しかも1630～40年代までは、それぞれの屋敷地に個別に区画溝が巡らされていて、中世的な屋敷の景観が読み取れる。「高松城下図屏風」に描かれたような、堀（板堀・土堀）や長屋門をもつ区画施設は、1640～50年代になってようやく出現してくる。つまり、9)で述べたような天守台下層と同様な（しかし規模は外曲輪の方がより小さい）区画溝がかなり遅くまで残ることが分かり、家臣団屋敷の景観も相当大きく変化したことがうかがえる。
- 11) 西外曲輪では、生駒家の家老クラスの家臣・上坂勘解由の屋敷普請に関わると見られる木簡（荷札）が出土している。1624年（元和10＝寛永1）に至ってもまだ屋敷内の建物の更新（新築）が行われていたことをうかがわせ、上記10)での屋敷景観の変化の一端を物語っている。
- 12) 数少ない天正～文禄期（1588～1595）と推測される瓦（第2図、14）参照）は、東外曲輪（後に東ノ丸となる）歴博地区に偏在する傾向にある。歴博地区では16世紀末の建物遺構は検出されていないため、城郭中心部（本丸・二ノ丸・三ノ丸側）での先行建物の存在を考えることができるかもしれない。

2-3. 町人地

- 13) 外堀の外側（南側）の片原町遺跡では、出土遺物の内容・組成から16世紀末に遡る可能性をもつ区画溝が検出された。やはり素掘り溝による屋敷地の区画であり、1640～50年代には出現する近世的な町家の景観とは異なる。むしろ、8)・10)で指摘した事象と共通する。



第25図 天正～文禄期と推測される軒平瓦

2-4. 瓦の年代観と供給体制

14) 16世紀末葉～17世紀初頭における高松城跡出土瓦を、香川中近世瓦検討会メンバーとともに検討し、3期4小期に区分できるとの見通しを得ている（第23表）。各時期の特徴は、以下の通り。

- I 期** 1588～90年代前半（天正16～文禄期）頃。在地系の瓦主体。まだ瓦の量自体が少なく、中世的で丁寧な製作技法が見られる。
- II-1 期** 1590年代後半（慶長1～5年）頃。在地系の系譜（瓦工集団）で集中的な生産に伴う粗雑化が進む。姫路系の直接的な影響の可能性をもつ系譜も出現する。
- II-2 期** 1600年代前半（慶長5～10年）頃。岡山城跡と同範・同文関係にある軒平瓦の系譜（三葉文系）が普遍化し、瓦の量が急増する。胎土・焼成ともに、近世的な特徴をもつようになる。
- III 期** 1600年代後半～10年代（慶長11～元和6）頃。それ以降も含むか。岡山城跡との同範・同文関係は継続。

15) 城・城下の建設を一定程度反映すると見られる瓦の大量供給は、II-2期～III期（慶長期）に本格化する。この大量供給は、岡山城との同範・同文瓦の流入によって実現している。瓦の製作地が岡山なのか、高松なのかは今後の検討課題であるが、高松での大量供給段階でも岡山城の大規模な普請は継続していることから、現状では岡山からの搬入の可能性の方に妥当性がある。

岡山では1590年代（文禄・慶長初期）に瓦の大量生産・供給の最初のピークがある。高松での大量供給はこれに後続するため、岡山城での普請が先行することが明確である。

土器陶磁器	想定年代	瓦/時期設定	高松城等/諸事象	高松城等出土瓦	宇多津系軒平瓦	軒平瓦群別				平瓦側面		切り離し	岡山城瓦
						1群	2群	3群	4群	I	II		
(様相0)	1584	O 期	三ノ丸周辺 /先行施設	松尾寺仁王堂		1群							
	1588～90前半	I 期		第4遺構面上層報告資料 S X 15	a								
様相1	1590後半～1600前半	Ⅱ-1 期	天守台	第4遺構面上層A-1/B-1区 S X 15		2群	3群	4群					3・4式
	Ⅱ-2 期	第4遺構面上層B-2・3区 天守台盛土・栗石層 天守台前掘		b									
		1600後半～10年代		Ⅲ 期	第4遺構面上層C/D区				c				
様相2	1620年代～				d								

第23表 築城期高松城における瓦の変遷

3. 文献史料の読み直し

3-1. 生駒氏の居館

16) 2) で述べた『南海通記』の記述では、黒田孝高と藤堂高虎による城地見分に先立ち、生駒

7 乗岡実2001「瓦について」『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会

発給した文書の内容が注目される（真行寺文書）。そこには「香東郡野原西浜に於て壺町四方之寺内屋敷に土台之事」として「寺門中海陸共に諸口事之事免除也」とあり、生駒氏が宝蔵寺境内周辺に対し税の免除などの庇護を行ったことが分かる。この地での宝蔵寺の建立年代は不明だが、仮に中世まで遡るとすれば、築城開始の年に既存の寺院に特権的な保護政策をとったことになる。

- 20) 西浜で真行寺に隣接して境内があった無量寿院は、戦国期には野原中黒（高松城中心部周辺）に存在したことが「さぬきの道者一円日記」（1565年、永禄8）から確認でき、発掘調査により西ノ丸がその旧境内地と特定された。境内廃絶以前の第3遺構面で出土した所用瓦の可能性をもつ大型の軒丸瓦は、コビキ法（コビキB）による。第3遺構面を被覆する整地層出土遺物の年代観等と併せ、「少なくとも17世紀以降に無量寿院が[西浜へ]移転したものと考えておきたい」（[]内は筆者）とされる¹¹（以上、この項の所見は、渡邊誠氏の御教示にもとづく）。
- 21) 「高松城下図屏風」等には、外堀に面した片原町に愛行院の境内が描写・表示されている。愛行院は、中世野原から継続する華下天満宮（中黒天満宮）の別当寺であり、城下における山伏の統括を行う役割が与えられていた。中世の境内の位置は不明だが、絵図が示す境内地の近辺にあったと推定してよく、城下に組み込まれた形ではあるが19)に近い事象と評価できよう。

3-3. 城下町と惣構

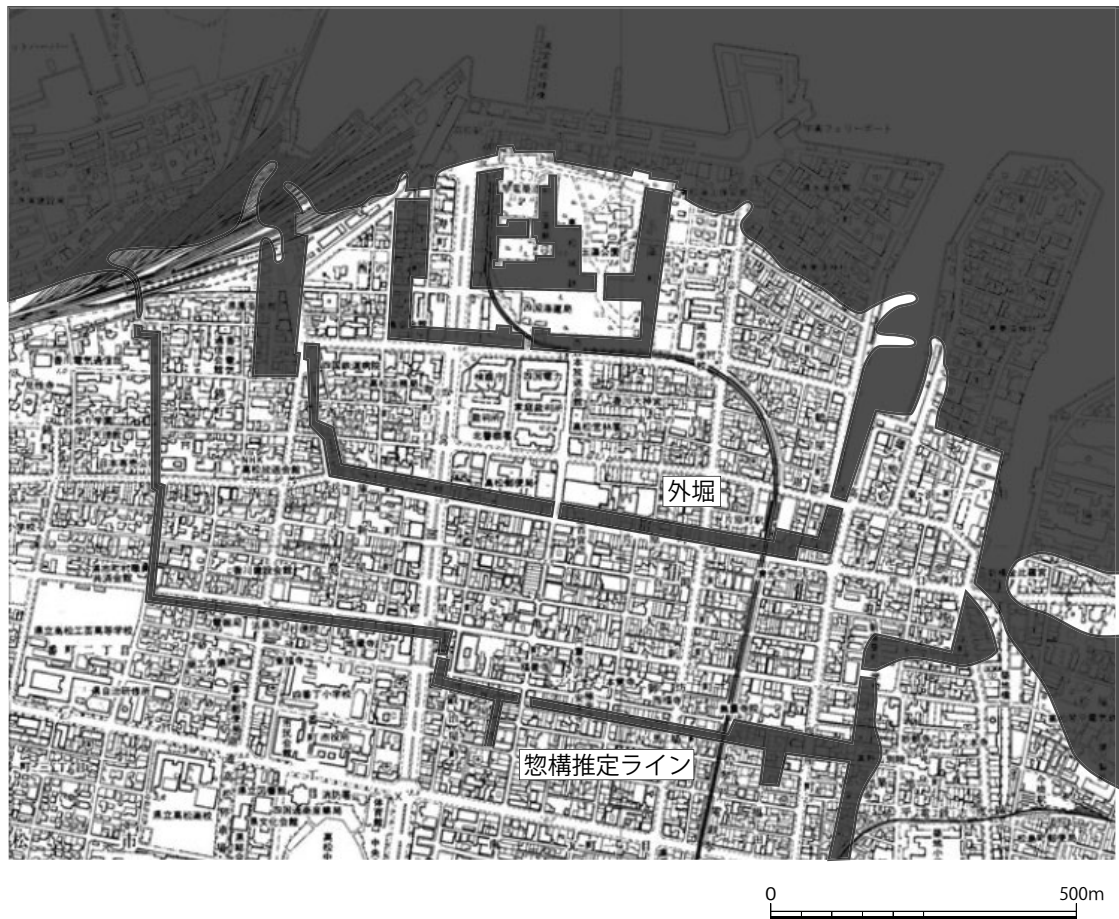
- 22) 城下大手筋の丸亀町は、1610年（慶長15）に生駒藩3代当主正俊によって丸亀城下町の商人を移住させて成立したとされる（『南海通記』巻廿下）。城下の中心市街地としての本町は、東外曲輪すなわち城内にあり、「高松城下図屏風」での町家の描写からも最も格式の高い町人地であったことが分かる。したがって丸亀町は、城下の整備・拡大に伴い新設された、後発的な中心市街地であるといえる。
- 23) 「高松城下図屏風」は1640～50年代の景観を描いていると推測されるが、南側の寺町を超えて城下が拡大している様子が読み取れる。寺町の外側（南側）には水路が連続的に描かれ、一部は馬場として埋め立てられており、本来は外堀に匹敵する幅をもっていたことが推測される。またこの水路の内側（北側）に寺町が連続しており、さらに町人地の南大手筋ではこの水路より内側が丸亀町、外側が南新町となっており、成立年代の異なることが読み取れる。こうした水路の存在から、当初は城下全体を囲む堀＝惣構が存在したことが指摘できる（第25図）。その完成は、丸亀町成立の1610年（慶長15）から「讃岐探索書」で「南二四筋アリ」（水路以北の範囲に相当）と記された1627年（寛永4）の間、おそらくは元和の一国一城令（1615

11 渡邊誠2015「香川の城下～高松城下町の成立とその背景～」『第6回発掘へんろー四国の近世』2014年度アワコウコ楽公開講座（後期）資料集

年：元和1）までに求められる。

3-4. 自立した家臣団

- 24) 「生駒家廢乱記附録」には、4代高俊の治世(1630年代)のこととして「壱岐守殿御家中大形[方]在郷、時々用事之有る節高松へ罷り出候に付、屋敷小分之由」([]内筆者)と記されている。また、「小神野夜話」には、「御家中も先代[生駒氏治世]は何も地方にて知行取居申候故、屋敷は少なからずは無之」([]内筆者)と記される。家臣に対して知行地を与える地方知行が行われていたため、家臣たちは知行地に留まり（在郷）、用事のある時だけ高松へ出仕していた、というのである。このことは、9)で述べた外曲輪の家臣団屋敷で築城当初の生活の痕跡が希薄であるという現象と併せて、興味深い事象である。



第26図 初期高松城・城下と総構

4. 高松城の建設過程と初期の景観

- 25) 初期高松城の建設過程は、①小規模で散発的な建設が進められ、領主生駒氏の居館も「仮屋形」にとどまった1588～1600年頃（第1段階）、②天守台の建設が始まり順次城郭中心部の建設・整備が進んだ1600年代頃（第2段階）、③新たな中心市街地としての丸亀町の建設が

行われ、寺町の形成がほぼ完了し、城下全体を囲む惣構が建設された1610年代前半（第3段階）、④家臣団の屋敷地がほぼ完成形に近づく1620～30年代（第4段階）、に区分できる可能性を、検証されるべき仮説として提示したい（第24表）。

- 26) 第1段階では、素掘りの区画溝を主体とした領主居館と家臣団・町人地の屋敷割が、部分的に行われていたと見られる。中世から継続した寺社については、暫定的に旧境内か若干の位置変更を伴う形での存続が認められた可能性がある（見性寺・愛行院等）。
- 27) 第2段階では、外堀より内側での城郭の建設や武家地の屋敷割が全面的に行われたと推測される。天守台を含む本丸や二ノ丸・三ノ丸・桜馬場・西ノ丸などが整備され、外堀とこれに沿った土塁もこの段階で建設されたか。ただし家臣の屋敷割は、素掘り溝を主体とする形で実現されたようである。この段階での生駒氏居館は三ノ丸にあり、桜の馬場の対面所とともに領主権力の政庁としての役割を担っていたものと推測される。
- 28) 第4段階を経て、城下町の膨張が著しくなっていた段階で高松城に入ったのが松平頼重であった（1642年：寛永19）。頼重入部直後から城下に多くの町触を出して都市法の整備にかかった背景には、初期高松城下町の変貌を受けて都市の新たな形での把握が指向された、と見ることもできるのではないだろうか。
- 29) 以上の状況を踏まえ、改めて『南海通記』の記事（2）に立ち戻ると、記事の内容の信憑性は別にして、黒田・藤堂が助言したのは城の立地であり、個々の曲輪配置といった具体的な縄張りではないことに気付く。また、具体的な縄張りが実現するのは第2段階であり、生駒親正の最晩年（関ヶ原合戦時に出家し、3年後に死去）であることから、直接築城に関与したのは2代目の一正であると見た方がよいであろう。黒田の中津城とは縄張りの違いが、藤堂の今治城での類似が指摘されるが、高松城の中心部は本丸から渦巻状に展開し、本丸が木橋で独立性が高いこと、また今治城で典型的にあるような馬出が明確な形では認められない（ただし実質的に各曲輪がその役割を果たすことはあり得る）ことから、藤堂の縄張りとも言い難い独自性をもっている。縄張り者の特定は今後の課題であるが、むしろ生駒親正あるいは一正の可能性を考えてもよいのではないだろうか。
- 30) ところで生駒藩では、高松城とほぼ同じ時期に丸亀城と引田城の建設が行われた。丸亀城は1597年（慶長2）に建設に着手し、1602年（慶長7）に竣工したとされる。また引田城は、最近の調査により高松城・丸亀城と同じく総石垣の平山城であることが判明したが、出土した軒平瓦の特徴から、やはり慶長期に集中的な建設が行われたことが指摘できる。つまり、慶長期が生駒氏にとって領国支配を固める意志が強く表れた時期といえる。
- 31) 対岸の岡山城と瓦を比較すると、既に述べたように岡山城の本格的な建設の方が高松城に先行する。城主・宇喜多秀家は信長政権下での中国攻め以来、秀吉と深い関わりがあり、1585年（天正13）には秀吉の養子として元服している。その後は豊臣政権の中で重用され、文禄

の役では総大将を務め、五大老に名を連ねるようになる。岡山城建設の最初のピークは、まさに豊臣政権における秀家の台頭と軌を一にしている。阿波の蜂須賀氏に居城の場所について秀吉からの指示があったことを参照すれば、豊臣政権初期段階では西国の最前線にあたるこの地域での政治的中心地の建設にあたり、「まず岡山城、次に高松城を造る」という政権の意向があった可能性がある。

以上のように、高松築城の過程を再検討することで、豊臣政権から徳川政権における生駒氏の位置付けや、領国支配のあり方を明らかにする端緒が得られるものと思われる。今後は、述べてきたような「仮説」の検証作業を詳細に進め、総合化していく必要があろう。

(2014年10月3日、2015年7月7日加筆修正)

	西暦	元号	事象	備考
第1段階	1587	天正15	生駒親正、秀吉から讃岐一国を与えられ、引田城次いで聖通寺山城（平山城）に入る	通記/生駒記/讃羽
	1588	16	生駒親正、高松築城を始める	通記/生駒記/讃羽
	1589	17	生駒親正、西浜・東浜の間に仮屋形を造り、藤堂高虎・黒田孝高に城地のアドバイスを 年貢米未納の山田郡百姓を西浜にて処刑する 佐藤志摩ら讃岐の武士をして郡村支配を行う	通記 生駒記/大日記/讃羽 讃羽
	1590	18	高松城、竣工するとの説あり 生駒親正、5,000余の軍勢を率いて小田原参陣	(出典不明) 讃羽
	1592	文禄1	生駒親正・一正、秀吉の命により5,500名を率い朝鮮半島に出兵	讃羽
	1594	文禄3	生駒一正、再度朝鮮半島出兵 この年から翌年にかけて親正は大坂滞在	讃羽 讃羽/宝簡集
	1597	慶長2	一正、2,700名を率いて再び朝鮮半島出兵 親正・一正、西讃岐支配のために丸亀城の築城を開始	讃羽 生駒記
第2段階	1600	慶長5	生駒一正・正俊、上杉攻めのために家康のもと関東に従軍 親正、豊臣秀頼の命で田辺城攻めに家臣を参陣させ、その後剃髪して高野山に出家 一正、家康のもとで岐阜城攻め、関ヶ原合戦に従軍 佐藤掃部に領国の仕置きを命ずる	讃羽 讃羽 讃羽 通記
	1601	慶長6	一正、生駒家の家督を継ぎ、家康より讃岐一国を安堵される	讃羽
	1602	慶長7	一正、丸亀城から高松城に移り、丸亀城には城代を置く	讃羽
	1603	慶長8	親正、高松で死去（78歳、異説に69歳）	生駒記/讃羽
第3段階	1610	慶長15	一正死去（56歳）、正俊家督を継ぐ 丸亀城下の商人を高松城下に移住させ、丸亀町とする	讃羽 讃羽/通記
	1614	慶長19	正俊、大坂冬の陣に参陣、家臣の活躍により家康から賞される	讃羽
	1615	元和1	正俊、大坂夏の陣に参陣 一国一城令により丸亀城、そしておそらく引田城も廃城	讃羽
第4段階	1616	元和2	正俊、大坂城修築のために石垣石材を幕府に献上	徳川実紀
	1620	元和6	正俊、大坂城修築に参加	徳川実紀
	1621	元和7	正俊、死去（36歳）、高俊家督を継ぎ、外祖父藤堂高虎、高俊の後見となる	讃羽
	1622	元和8	藤堂高虎、家臣の西島八兵衛らを讃岐に派遣して藩政を執らせる	讃羽
	1624	寛永1	西外曲輪の上坂勘解由屋敷に多量の材木が運び込まれ、屋敷の普請が行われる	(出土木簡)
	1627	寛永4	幕府隠密が高松城・城下を探索する	讃岐伊予土佐阿波探索書
	1636	寛永13	江戸城総郭の造営に際し高俊は石垣を担当 高松城石垣の修築を幕府より許可される	徳川実紀 宝簡集
	1640	寛永17	家臣団の対立激化し、国元派175名をはじめ総勢3,000～4,000人が高松を退去（生駒騷 生駒高俊、幕府から改易の処分を受け、出羽国矢島1万石に移される	讃羽 徳川実紀
	1642	寛永19	松平頼重、常陸下館から讃岐高松へ入る 山崎家治、丸亀の古城の修築を幕府より許可される	英公実録 徳川実紀

第24表 高松築城の履歴と生駒氏の動向

通記/南海通記、讃羽/讃羽綴遺録、宝簡集/生駒家宝簡集

付記 初期高松城絵図の系統推定

32) 上記17) で記した「明屋敷」に関連する可能性のある記述が、いくつかの絵図で見られる。「讃岐国香川郡高松城図」(香川県立ミュージアム所蔵、『高松城史料調査報告書』での番号は絵図41、以下同じ)と、これに近似した描写形式をもつ一群の絵図がそれである。絵図41では三ノ丸に「屋形」、「主図合結記」(絵図42)では「此丸城主居住」、「各藩城図讃岐国高松之城」(絵図44)では「城主居住」、「讃岐国高松城図」(絵図46)では「此丸屋形有」と記される。この「屋形」が「高松城図」(絵図1 = 影写本の原本)の「明屋敷」と同一対象を示すのかが問題となる。

絵図41以下の諸本は、「松平頼重による新曲輪[北ノ丸・東ノ丸]造営前の状況を描いているが、三ノ丸に御殿が描かれるなど新曲輪造営後の要素もあり、新旧の情報が混在したものである」([]内筆者)とされている¹²。そこで、新曲輪造営前の高松城絵図諸本について、描写内容の系統関係を推定することで、上記問題を考える一助とする。

33) 新曲輪造営前を描いた絵図は、以下の6群に分けられる。

- I 群 「讃岐高松丸亀両城図 高松城図」(絵図6)等。城下周辺地域も描くが描写は極めて主観・模式的表現。中央の城郭部分の表現も極めて簡略で、実態とは異なる方格プランにもとづく正方形に描写。
- II 群 「高松城図」(絵図1 原本)・「寛永四年高松城図」(絵図2)。寛永4年(1627)8月23～27日の5日間、幕府隠密が高松城・城下を探索して作成した絵図。城内・城下とも全体に単一の方格プランを基調とした正方形に描かれる。
- III 群 「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」(絵図3)・「讃岐国高松城図」(絵図5)等。I・II 群よりもやや狭い範囲ではあるが、城下周辺まで含めて描写。城郭臨海部の石垣・捨石・波止・船蔵などに独特の表現。東浜沖で東西方向に横たわる「浜洲」の表現も特徴的。城内・城下ともに単一の方格プランを基調とした正方形に描かれる。絵図3・5の来歴(生駒氏改易後に讃岐国を預かった大洲藩加藤家に伝来)からすれば、原本である絵図3は生駒氏改易(寛永17年、1640)前後に作成されたと見られる。
- IV 群 「諸国当城之図」(絵図12)・「讃岐高松丸亀両城図 高松城下図」(資料8)等。III 群とほぼ同じ範囲を描くが、中堀と外堀の東西線が斜交しており、かなり実態に近い表現になっている。これに伴い、大手南側の町人地の地割は城内や武家地のそれとは異質な方格プランとして描かれる。また、絵図12には東浜沖の「浜洲」が描かれ、III 群に近い表現となっている。なお、「高松城下図屏風」で想定される原本や、外堀から内側のみを描いた「讃州高松城之図」(絵図4)もIV 群に含まれる。

12 大嶋和則2009『高松城史料調査報告書』高松市教育委員会

V群 「日本古城絵図 讃州高松城図」(絵図13)・「讃岐高松之城図」(絵図14)・「讃岐高松城図」(絵図15)。Ⅲ・Ⅳ群と同様の範囲を図化しており、城内・城下ともに単一の方格プランを基調とするところはⅠ～Ⅲ群と共通するが、舟入や波止、東浜の塩浜の表現等はⅣ群に近似している。石垣や塁線・城門を太線で、櫓を四角く塗り潰す(もしくは太線で四角形に表示する)点は、軍学図としての特徴をもっており、絵図15は池田斉輝(1815年:文化12に改名し、1819年:文政2に死去)の「軍学学習用に、家臣たちが描いた図を集めて袋入りにまとめたものと思われる¹³」とされ、軍学図としての来歴が明らかである。

Ⅵ群 「讃岐国香川郡高松城図」(絵図41)・「主図合結記」(絵図42)・「各藩城図讃岐国高松之城」(絵図44)・「讃岐国高松城図」(絵図46)等。外堀付近から内側をクローズ・アップして描く。単一の方格プランで描かれるところはⅤ群と同様で、西浜舟入の内側(東側)が弓なりに緩やかな湾曲を描くように表現されているところはⅤ群に近似するが、後述するように東ノ丸造営後の情報が盛り込まれているようである。

34) Ⅳ～Ⅵ群の景観年代と、群毎の絵図情報の前後関係を整理する。Ⅳ群は、「高松城下図屏風」想定原本を除き、西新門設置以前の状況の描写であり、Ⅲ群に近い時期の景観と判断される。具体的な年代について、絵図の内容・記載から推定する。手がかりとなるのは、桜馬場旧太鼓門西側の5区画とその北側の西ノ丸南端の居住者(施設名)である。1640年前後と推測される絵図3(Ⅲ群)と、西ノ丸西新門架設後の「高松城下図屏風」(1640～50年代)との間を整合的に繋げると、第25表のような順序が推測できる。

推定 順序	群	絵図番号	名称	桜馬場旧太鼓門西側5区画(東から)					西ノ丸南端
				1	2	3	4	5	
1	Ⅲ	絵図3	生駒家時代讃岐高松城屋敷割図	近習者やしき	近習者やしき	近習者やしき	局屋敷	女房家	女房家
2	Ⅳ	絵図8	讃岐高松丸亀両城図 高松城下図	鷹匠	厩	—	局	—	—
3		絵図4	讃州高松城之図	加河与三蔵	馬屋	林拾左衛門	青木行成	局方	■蔵
4		絵図12	諸国当城之図	勘定場	馬ヤ	士	士	士	蔵
5		—	高松城下図屏風	(資材置場)		(武家屋敷)	(武家屋敷)	(武家長屋?)	(蔵)

第25表 桜馬場・西ノ丸南端の変遷

絵図8・12は、非常に近似した描写内容をもつ。①東西舟入の波止の形状、②西浜舟入西岸の船渠の形状、③東浜の塩浜周辺の形状、等が共通しており、先行すると見られるⅠ～Ⅲ群とは異質な描法である。その一方で、④絵図12に描かれる東浜沖の浜洲が絵図8では描かれない、⑤絵図12で描かれる西ノ丸・三ノ丸沖に延びる2本の構造物が絵図8には描かれない、⑥城下の町名や曲輪・堀幅などの情報が絵図12にはあり絵図8にはない、といった相違がある。上記のように絵図8が先行的な情報にもとづくと思われることから、絵図8・12には共通の祖本があり、それぞれで描法や情報が取捨選択され、または加筆されて調べられた

13 倉地克直2010『平成22年度池田家文庫絵図展 絵図にみる中国四国地方の城下町』岡山大学附属図書館

と考えることができるのではないか。

絵図4は、①と⑤（この絵図で2列の柵であることが分かる）が絵図12と共通しており、絵図8よりも近縁であることが想定される。以上の所見から、とりあえず第4表（Ⅳ群の項目）のような系統関係が推測できる。なお、これらの祖本は、さらに遡りⅢ群と祖本を同じくする可能性があるだろう。

- 35) Ⅴ群は、西新門設置以後の描写であり、Ⅳ群よりも後出的な内容をもつ。絵図13・14に表示された高松松平家家臣の名前から、1646年（正保3）～1654年（承応3）の状況を示すとするのが相応しい。一方で、城下の描写では①丸亀町筋と東側の通町筋との間の街路が4本描かれ（実際は3本）、②おそらく街路表示の混乱に関連して、亀井戸から延びる水路や馬屋（厩）・大本寺・正法寺・大乘寺・愛行院の位置表示が実際と異なる、といった明らかな過誤が認められる。また描写年代が重複すると見られるⅣ群の「高松城下図屏風」と比較すると、③桜馬場南東隅と三ノ丸北西部（中堀北西隅）、西ノ丸北西隅に櫓の表記がされる（城下図屏風では描かれない）一方で、三ノ丸南東部の龍櫓が表記されず、本丸南西の地久櫓が表記されない場合もある、といった齟齬が指摘できる。

上記①・②の過誤全てと③の齟齬の大半は、Ⅴ群の全ての絵図に共通しており、同一系統の絵図から筆写された可能性が考えられる。絵図13～15を相互に比較すると、最もオリジナル（祖本）に近い情報が描写・表記されていると思われるのは絵図14であり、絵図13・15は東外曲輪の墨線を黒塗りしている点で別の色で表現した¹⁴絵図14よりも表現の簡略化が認められ後出的かつ同類的である。しかし絵図13には内堀に「八十五六間斗」との絵図14には見られない表記があるため、絵図14とは別の絵図を下敷きにしている可能性がある。また、本丸地久櫓が絵図13では表示されず絵図15には表示、また外曲輪の「蔵」や家臣名が絵図13では表示され絵図15では表示されない、という相互に異なった情報が欠落していることから、絵図13・15は直接的な前後関係ではなく、別の祖本から別々に筆写された可能性があるだろう（第26表Ⅴ群の項参照）。

なおⅤ群で最も祖本に近いと見られる絵図14は、④城郭中心部の軸線と城下の軸線の僅かなずれ、⑤沿岸部（特に舟入の波止、東浜の塩田）の描写、がⅣ群によく似ている。したがってⅤ群は、Ⅳ群のいずれかを祖本とする可能性がある。

- 36) Ⅵ群は、東浜舟入西側の町人地（北浜町・下横町）が新たに埋め立て造成されている様子が描かれていること、また烏櫓・太鼓櫓のように東ノ丸造営後に建てられた櫓が描かれていること、さらに絵図41で西外曲輪に「米蔵」、桜馬場に「蔵」と表記されていることなどは、絵図が示す「東ノ丸造成以前」という構図に合致しない要素であり、作成年代が下ることを示している。おそらく18世紀以降の情報にもとづくものであろう。その一方で、西ノ丸

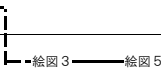
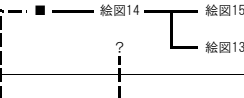
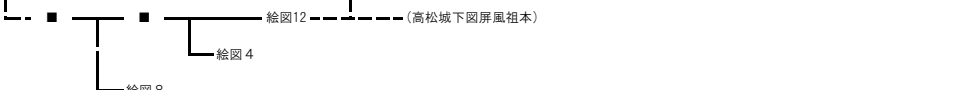
14 「城下図屏風」では柵と長屋として描かれており、城郭中心部の石垣・土堀・多門よりも軽微な防御施設であることが分かる。

の「蔵」、東外曲輪の「菜屋（魚菜屋）」という記載は、東ノ丸造営以前には存在した情報であるが、前者は東ノ丸造営後のいつ廃されたかは不明で、後者は東ノ丸以後もその外側（東側）で存続する地名である。したがって、Ⅵ群の絵図に東ノ丸以前に限定できる情報を見出すのは困難である。

Ⅵ群の特徴として、外堀より内側がクローズ・アップされているが、その割に城内のプラン（平面）の描写は極めて簡略なことが挙げられる。軍学図的な要素が認められるが、大手門や東浜土橋門の描写は極めて不正確であり、同様に軍学図的なⅤ群と対照的である。また、桜馬場東端に「サクジ小ヤ」（絵図41）・「作事小屋」（絵図42・44）と表記されるが、東ノ丸造営前にはこの場所は対面所であり作事小屋が存在する余地はない。東ノ丸南半部を占める「作事丸」と混同している可能性があるだろう。

以上のように、Ⅵ群に盛り込まれた情報は極めて不正確かつ混乱が見られ、実地見分を経ないでⅤ群などの先行絵図と18世紀の絵図をもとに作成されたことが考えられる。このことを踏まえると、32) で記した三ノ丸における「屋形」、「此丸城主居住」、「城主居住」、「此丸屋形有」という情報を、Ⅱ群の「讃岐探索書」での「明屋敷」に直接繋げて捉えることには慎重にならざるを得ない。やはり大嶋2009で指摘されているとおり、披雲閣のことを示すと見た方がよいであろう。

- 37) まとめると、高松城の実態を描いた絵図として信頼が置けるのは、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群であり、Ⅴ群は城下の描写に不正確な点が指摘でき、Ⅵ群は描写そのものに問題が多い机上の軍学図といえる。Ⅲ・Ⅳ群は描写の共通性から祖本を同じくする可能性を指摘したが、そうでなくともⅢ群は生駒氏改易に伴い作成されたと見られ、Ⅳ群は「高松城下図屏風」の下敷きと考えられることから、それぞれの祖本は藩関係者が作成した公的な絵図であると見てよいであろう。ちなみにⅢ・Ⅳ群の違いである単一方格指向（Ⅲ群）と実態に即した異方位方格混在（Ⅳ群）の描法は、18世紀以降の絵図にも共存することから年代的な差異としては捉えられないであろう。またⅡ群は、幕府隠密による作成であるため、概ね情報の正確さを期して作成されたと考えられる。細部の相互比較が今後の検討課題であるが、17世紀前半の高松城・城下の変遷は、Ⅱ→Ⅲ・Ⅳ群をもとに検討すべきである。

群	西ノ丸西新門建設以前	西新門建設以後	東ノ丸造営以後
I 群	絵図 6 ?		
II 群	絵図 1		
III・IV 群 祖本			
III 群			
V 群			
VI 群			
IV 群			

第26表 初期高松城絵図 系統推定図

絵図番号は、大嶋和則2009『高松城史料調査報告書』高松市教育委員会による